

大阪医科薬科大学
薬学部 阿武山キャンパス
災害時研究環境早期復旧ガイド

1. 災害時の対応

現在、本学において危機管理体制を再構築することとなり、災害発生後、いち早く業務を再開させるための事業継続計画（**Business Continuity Plan : BCP**）の作成を、病院を含めた大学全体で行っています。薬学部の研究環境も例外ではなく **BCP** を作成する必要がある、このたび5つの委員会が連携し、災害時いち早く研究環境を復旧させるためのガイドを作成いたしました。

万一の際、このガイドを活用していただき、早期復旧にお役に立ていただければ幸いです。

4. 震災後の動物関連研究施設内への入室、飼育措置の点検等の際の

留意事項（薬学研究支援センター動物関連研究施設運営委員会）

地震の場合、備品、機器、書庫、ロッカー類の転倒や・棚の上の物などが落下するので、これらの危険から身の安全を守ることを第一に考える。

また、二次災害の発生する恐れのある危険物・可燃物等については、日頃から数量を制限するとともに以下の項目に注意する。

- ① 保管に当たっては、不燃性（耐火性）の容器を用いる。
- ② ボンベ類は計測器等を外し、壁面に鎖で固定するか横に倒し転がり防止措置をとる。
- ③ 各種機器類で転倒しやすいものは固定しておく。
- ④ 飼料、資材の備蓄をしておく。
冬期、または夏期に停電等により空調設備等が停止した場合、温湿度等飼育環境の変化に充分留意する。

(1) 緊急措置

地震の場合は火災、停電も同時に発生する場合が多いため地震の項目だけでなく、火災、停電等の項目についても留意すること。また地震の規模、建物の被災の状況をみて以下の判断を下す。

- ① 平日の発生
 - (ア) 自身の身の安全を確保する。
 - (イ) 施設利用者（教職員・学生）の安全確認を行う。
 - 1) 施設内各区域に声をかけながら滞在者を確認し、避難させる。
誘導にあたっている教職員の指示、誘導に従って行動する。
 - 2) 時間的余裕があれば、水道・ガス・電気・機器・設備等を停止する。
 - 3) 万一、負傷者等があった場合は、その救助を優先する。
 - 4) 施設内に人が取り残されていないことを確認する。
 - 5) 施設管理者およびテレビ、ラジオ等から情報を収集する。
- ② 休日・夜間の発生
 - 1) 自身と家族等の安全を確保する。
 - 2) 通信手段が使用可能であれば緊急連絡網に従って連絡する。

- 3) 震度 5 以上の地震で、交通手段と出勤途上の安全が確保できると判断した場合には、自主的に施設に集合する。この場合決して無理をしない。
- 4) 薬学総務部管理課（内線 220）, 総務課（内線 210）に連絡する。

(2) 施設外脱出時の対応

- 脱出時には開けた扉は必ず閉める。

(3) 二次災害発生防止措置

災害がおさまったと判断したら、二次災害や被害の拡大防止のため、二次災害が起こると判断される箇所を優先的に分担して緊急点検する。また点検の結果、異常があれば現場責任者に報告を行うとともに応急措置を行い、二次災害の発生防止に努める。

① 火災防止措置

- (ア)施設外のガスメーター（建物全体対象）及び施設内システムのボイラーには感震付きメーターがあり、地震が起こった場合には自動的にガスの供給が停止する。
- (イ)電気器具のコンセントを抜く。
- (ウ)オートクレーブは直ちに緊急停止ボタンを押して機械を停止させ、電源を切り、蒸気バルブを閉栓する。

③ 転倒、落下物等の措置

- (ア)機器などを使用していた場合には、直ちに電源を切る。
- (イ)転倒したボンベ等はバルブの緩みをチェックし、転がらないようにしておく。（立てると余震で再度転倒する可能性があるのものでそのままにしておく。）

④ 飼育動物の状況確認および実験動物の処置

- (ア)飼育ラックが倒れ、動物がケージより逃亡した場合は直ちに収容に努める。
 - 1) 個体識別が可能な動物は、元のケージに戻す。
 - 2) 個体識別が不可能な動物は、別のケージに集めて収容する。
- (イ)実験動物の飼育継続の可能性を判断する。

- 1) 飼育継続が原則であるが、被災等の状況を勘案し、その判断は学部長が行う。学部長が不在で急を要する場合は、原則として動物関連研究施設管理責任者が判断する。
- 2) 飼育の継続が可能と判断した場合は、適切な方法で飼育する。
- 3) 飼育の継続が不可能と判断した場合や逃亡して個体識別が困難な場合は、学部長（学部長が不在の場合には動物関連研究施設管理責任者）が、動物関連研究施設運営委員会と協議して処理する。